
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 284

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5661. 動的な建築物としての音楽
- 5662. 読書の弊害:今朝方の夢
- 5663. この秋の一時帰国に向けて
- 5664. 発狂した作曲家と画家への関心
- 5665. 建築物に音楽を見出すこと
- 5666. デジタルアートの創作に向けて
- 5667. 才能も関心も全くなかったこと
- 5668. 今朝方の夢
- 5669. 自我の特性:日本へのフライトを予約して
- 5670. 加藤家のルーツを辿る旅
- 5671. 構成概念の奴隷とAIの奴隷:人生の有限性
- 5672. アートの国オランダにやって来て
- 5673. 絵画の創作に向けて:今朝方の夢
- 5674. デジタルアートの創作に向けて:iPad Pro購入の検討
- 5675. 1日の活動時間の見直し
- 5676. 『如水会々報』と油絵
- 5677. 言葉・音・絵(イメージ)を通じた内的リアリティの創造に向けて験
- 5678. 絵画作品を基にした作曲実践:ハーモニーの学習の進展
- 5679. 瞑想実践としての作曲と絵画の創作
- 5680. 日記の執筆・作曲・絵画創作の勧め

—音楽は動く建築である—ル・コルビュジエ

時刻は午前6時半を迎えた。今日も大変穏やかな朝の世界が広がっている。辺りはすっかり明るくなっており、水色の空が見える。昨日の日記で書き留めていたように、今、オスの小鳥たちがメスに自身の健康状態をアピールして鳴き声を上げている。彼らの鳴き声が単に美しいだけでなく、そこに生命の力強さのようなものを感じていた理由が分かった気がする。

明後日からサマータイムに入るが、明後日からの1週間は最高気温が10度を下回り、最低気温に関してはマイナスの日もある。一方で今日は最高気温は13度まで上がるようなので、春の陽気を感じられるだろう。

昨夜、ピカソの画集を眺めていた。ピカソの絵を何気なく眺めていると、その脇に記されたピカソの言葉に目が止まった。ピカソは、絵画の制作を日記の執筆のようだとみなしていた。そのことは以前から知っていたように思えるが、なぜか昨日はそれが自分に響いた。

自分も同様に、音を通じてその日を記すことを続けていく。日々の作曲実践は、それ以下でもそれ以上でもない。その日1日を十全に生きたということを音で記していくためにそれがある。

狂気が正気に変容する境界線上で絶えず曲を作っていく。狂気さを膨らまし、それを絶えず正気さのテリトリーに流し込んでいき、それを創造エネルギーに変容させていく。そうした過程の中で、膨大な音の構築物を独り静かに建立していく。目には見えない構築物を、独り粛々と積み上げていく。建築家のル・コルビュジエが述べているように、音楽は躍動する建築なのだ。それをここ最近強く実感する。理論書を片手に譜例を再現しているときには、本当に作曲家が作り上げた音の建築物が立ち現れる。そして自分が曲を作った際にも、小さいながらもやはり何かしらの建築物がそこに出て来ることを実感する。

ここ最近作曲実践の合間に、曲の意味や役割について考えることがある。人類史を遡ってみると、詩や音楽が民衆の教化のために活用されていた時代があった。今もその側面があるかもしれない。やはり詩や音楽には、意識に働きかけ、それを育む作用があるのだろう。

孔子が述べていた芸術論を思い出す。詩を通じて言語を司る感覚を涵養させていき、音楽にて人格の完成がなされるというような発想を孔子は持っていたように思う。言葉の世界から離れていくことに関心を持っている今の自分からしてみると、仮に詩の創作がそうした方向に目的を置いていないのであれば、詩の創作には関心がない。言葉の世界が豊かなのは百も承知であり、今このようにして言葉の世界の中で言葉を綴っているのは確かだが、今の自分の向かう先は言葉の世界から離れていくことである。このようにして日記を綴っているのは、実は言葉の世界から離れていくためなのだろう。そのような役割があるように思えてくる。フローニンゲン:2020/3/27(金)06:43

5662. 読書の弊害:今朝方の夢

昨日はふと、今後どこかのタイミングで、アーティストの治癒と変容支援に向けた取り組みに従事したいと思った。それはまた思いつきであり、どのような形でそれが実現されるかは不明である。その志向性が精神の支援にあることは確かである。

午前6時半を過ぎたこの時間帯の雰囲気は、いつも心を落ち着かせてくれる。ちょうど朝日が昇ってきて、小鳥たちの鳴き声がそれを祝福するかのように大合唱を奏でている。空がとても綺麗だ。風も一切なく、世界が美しさの中にたたずみ、美そのものとして顕現している。今日も1日を通して、楽しさと喜びの中で作曲実践に打ち込んでいこうと思う。

来月の初旬に書籍を一括注文し、それが届くまではあまり本を読まないようにする。読書というのは、私たちの知性を育み、意識を涵養させてくれる力がある一方で、逆に知性と意識の成長を阻む力もあることを最近実感する。どのような書籍とどのように向き合うのか、そしてどれだけの量の活字情報と接し、頭を言語空間から別の空間に移行させる時間と実践があるのか否かによって、読書は私たちの知性と成長を育んでくれるものになる一方で害にもなる。

膨大な投入量の読書をする人はそれほど多くなく、一方でそうした読書をしている人の中でそれを自身の知性と意識の発達につなげている人の数は少ない。そうなってくると、大多数の人間は、読書をしない害と読書をする害を被っているのではないかと思えてくる。今後も読書との向かい方については考えを深めていき、読書という実践についても絶えず工夫をしていく必要がある。

大空を一羽のカモメが優雅に舞って行った。朝日の輝きが、カモメの白い体に反射して光っている。

それでは、今朝方の夢について振り返り、その後、毎朝の楽しみである早朝の作曲実践に取り掛かりたい。

現在、世界の様々なスケールについて学びを深めていて、辞書的な理論書を片手にいろんなスケールを曲の中に適用している。うまく適用することができることもあれば、違和感を感じさせることもある。いずれにせよ、試行錯誤をしながら形にしていくこともまた曲を作る楽しみである。

ここ最近では毎日10曲ほど小さな曲を作っているが、仮に今後もこうしたペースで曲を作れたと想定し、後85年ほど生きると仮定しても、生涯に生み出される曲の数は25万曲ぐらいにしかない。本当に微々たる数の曲である。その事実時々愕然としてしまうことがある。100万曲でも、1億曲でも少なく感じてしまうのはなぜなのだろうか。作曲においても量的思考が混入していることの現れなのか。いや、そうした発想に関して言えば、金銭的な領域においては既にそうした発想から脱却しているはずであり、やはり人間の性として、無限なるもの、永遠なるものを求める衝動が自分の中にまだ強く根付いているのだろうか。そうした衝動及び執着を脱却するためにも、考えられるだけの、いや今の自分の想像を遥かに超えた音の大伽藍を作っていこう。今日生み出される小さな曲の一つ一つが、そうした大伽藍の素材の一つになる。

夢。そう言えば、今朝方の夢について振り返ろうとしていた。

夢の中で私は、実際に通っていた高校の教室の中にいた。教室には生徒がほとんどおらず、みんな次の授業が行われる教室に移動しているようだった。私は教室に忘れ物か何かがあったので、そこに戻ってきていた。

教室の時計を確認すると、次の授業までもう時間があまりなかった。次の授業は日本史であり、なぜかその授業を担当するのは、大学時代にお世話になっていた会計学の権威の教授だった。授業が行われる教室番号は「2000」であり、時間があまりなかったので、私は急いで教室に向かった。廊下を小走りしていると、小中高時代の親友(FK)に出会った。彼とその場でゆっくり話をしたかったが、如何せん時間がなかったので、私は彼と二、三言葉を交わして彼と別れた。

授業が行われる教室は別棟の2階にあり、階段を上ろうとしたときに、中学時代の一つ上の代のバスケ部の副キャプテンがいた。私は先輩に声をかけ、先輩が入っていこうとする教室に私も入ろうとした。私の頭の中ではそこが教室番号2000だと思ったのである。だが、教室内には見知らぬ先輩ばかりがいて、みんな黙って授業を聞いていた。その光景がとても奇妙に思えてしまい、私は教室に入るのをやめて、もう一度教室の札を確認したところ、そこは教室番号2002であった。目的の教室は隣の隣であった。

目的の教室に到着すると、先生はまだやってきておらず、出席に間に合ったと思ってホッとした。すると、今度は一つ上の代のバスケ部のキャプテンだった先輩が私の近くにやってきて、歴史上のある事件について教えてほしいとお願いをしてきた。どうやら先輩は、先日習ったその事件に関して、その事件の説明の箇所だけ聞きそびれてしまったようだった。しかしながら、私もその事件について詳しく知っているわけではなく、その事件に詳しいと思われる同級生の友人(YK)に尋ねてみるといいのではないかと先輩に伝えた。

そこで夢の場面が変わった。今朝方は上記の他にも夢を見ていたのを覚えている。その夢の中では、数人の見知らぬ女性と話をしている、雰囲気はとても和やかだった。フローニンゲン:2020/3/27(金)07:14

5663. この秋の一時帰国に向けて

時刻は午後8時を迎えた。今、夜空に三日月が見える。

今日も1日を通して晴天であり、午後には日光浴を楽しんだ。ここ最近では幾分長い時間日光浴を楽しんでいる。それはこれまでの冬に太陽の姿を拝むことがごくわずかであったことと無縁ではないだろう。だが明日からは、日光浴の時間をもう少し短くしてもいいかもしれない。そもそも紫外線の浴び過ぎは害があることは知っていたが、如何せん太陽光に対する飢えのようなものが身体にあったのだと思う。

明日からは日光浴をほどほどにした後に、仮眠前にはハーモニーかフーガの理論書を参考にして1曲ほど作り、その後に仮眠をするような習慣にしたい。日中は調べてものがたらインターネットを不必要に活用してしまうことがあるが、本当に必要な調べ物をする時だけインターネットを活用するよ

うにし、自分の活動に集中したいと思う。自らの取り組みに集中するための脳の状態を作る際に、過度な情報は害悪である。

夕方近所のスーパーに買い物に出かけた際に、やはりまだコロナウイルス対策を行っていた。具体的には、スーパーの入り口にある特設の手洗い場で手を洗ってからスーパーに入ることが義務付けられている。それを済ませて店内に入り、必要なものを購入した。残念ながらここ最近はこのスーパーでクロレラが置かれなくなってしまった。これまではクロレラを買い支えてきたつもりだったが、自分だけの力では足りず、店頭から消えてしまったのは残念だ。

クロレラは栄養豊富で健康に良いはずなのに、人気がなかったのだろう。海藻類の味にあまり馴染みのないオランダ人にとっては、クロレラの味が苦手だったのかもしれない。それに加えて、価格もオーガニックコーナーの中においては高い方だったことも原因かもしれない。夕食時の味噌汁にクロレラが絶妙に合っていたのだが、今はクロレラの代わりにモリンガのパウダーを和えている。これもまた美味である。

明日からは土曜日を迎える。数日前にアテネ行きフライトの予約変更をしたばかりであるが、そろそろこの秋の一時帰国のフライトを確保しようと思っており、それを明日中に終えたいと思う。昨年と同様に、今年も合計で3週間ぐらい日本に滞在しようかと思う。今回からは成田空港ではなく関空を利用し、関西での数日間の滞在を経て、福井県と石川県に足を運ぶ。その後実家に移動し、実家で10日間ほど過ごそうかと思う。

日本に一時帰国する前と後にはフィンランドに立ち寄り、アイノラにある小さな美術館に帰国前に足を運び、帰国後にはヘルシンキの美術館に足を運ぶ。そのような計画を立てている。日本に一時帰国中の福井県と石川県において具体的にどこを訪れるかに関しては今後詰めていく。フローニンゲン:2020/3/27(金)20:34

5664. 発狂した作曲家と画家への関心

時刻は午前5時を迎えた。今朝の起床は4時半前であり、目覚めて寝室の窓を開けると、小鳥たちの鳴き声が聞こえてきた。

先日言及したように、オスの小鳥たちは朝に鳴き声を上げることで、メスに健康状態をアピールしているとのことだが、ふとメスも同じように鳴いているのだろうかと思えた。朝に聞こえてくる鳴き声はオスのものだけなのだろうか。オスの鳴き声に応えるようにメスも鳴き声を上げているのだろうか。そのあたりが気になる。オスとメスとで声帯が異なれば、声の高低も変わるはずであり、そのあたりをまだ聞き分けることができない。もう少し注意深く彼らの鳴き声を聞いてみよう。

日常のありとあらゆることを音楽的に捉えようとする。それを意識してみようと昨日思った。上記の小鳥の鳴き声に関してもその一環である。数学者が身の回りのありとあらゆる事柄に数学的な何かを見出そうとするように、身の回りのありとあらゆる事柄に音楽的な何かを見出すようにしてみる。それは物理的な現象のみならず、社会的な現象においてもだ。物理的な現象や社会的な現象の背後に数学的な何かがあるのと同じように、それらの背後には音楽的な何かも常にある。なぜなら、全ての現象の根幹にはリズムがあるからである。

世界は音の海であり、音の宇宙である。そうした世界から絶えず音楽的なものを汲み取っていく。

幻聴を聴き、精神が狂った末に自殺を遂げたロベルト・シューマンの音楽に関心を持っている。シューマンの楽譜を参考に行っている際に、ふとした箇所でも半音階を時折使用していることが気になっていた。その響きが独特であり、それは一聴すると甘美な響きなのだが、その背後には死の香りがあると述べてもいいかもしれない。その甘美さは、死の甘美さなのだろうか。精神的狂気の香りも背後に隠れているように思える。それらの香りを嗅ぎながら、シューマンの音楽も参考にしていこう。

シューマンと同様に、スメタナも幻聴を聴き、その後発狂してしまったそうだ。作曲家だけではなく、例えばゴッホも発狂したことで有名だが、どうやら私は発狂した人間に関心を持つ傾向があるようだ。発狂した作曲家の音楽から精神的狂気を聴き取り、発狂した画家から精神的狂気を心眼で捉えたいと思う。

シューマンやスメタナは幻聴に悩まされたということだが、脳の特性上、幻聴を聞くということがそれほどおかしなことではないということが理解されていけば、発狂せずに済むのではないかと思ってしまう。私たちは誰も幻聴を聴くことが可能であり、しかもそれは容易である。例えば、懐かしの曲を

今この瞬間に思い浮かべてみると、その音楽が脳内に聞こえて気やしないだろうか。端的には、それは幻聴であり、それは容易に聞こえてきたのではないかと思う。

おそらくシューマンやスメタナは、音を聴き取る脳の部位が特殊に発達したか機能障害を起こすかによって、四六時中音楽が頭の中に鳴っていたのだと思う。音を司る感覚を開き、脳が特殊に発達すれば、四六時中世界から音を汲み取るということはそれほどおかしなことではないように思う。そうした感覚の解放と脳の発達に向けて歩を進めようとしている自分がいる。その一步一步は慎重だが、それは着実な歩みである。狂気に近づき、正気に至ろうとする自己がここにいる。フローニンゲン:2020/3/28(土)05:42

5665. 建築物に音楽を見出すこと

スイスの建築家ル・コルビュジエはかつて、「音楽は動く建築である」という言葉を残した。以前より、音を通じて自分の内側に無限大の大伽藍を作ろうとしている自分がいることに気付いており、それは作曲をする一つの動機として大きなものであることに気付いていた。

ル・コルビュジエの言葉を受けて、建築というものにも関心を広げようと思う。幸いにも現在住んでいるヨーロッパには、興味深い建築がたくさんあり、建築的な発想と感性を養う上では申し分ない。

今生活をしているフローニンゲンの街を歩く際にも、そしてヨーロッパの旅の最中において様々な街を訪れる際には、建築に着目してみようと思う。そうした観察が作曲上の何らかのヒントになるはずである。建築における設計と造形美から汲み取れることがたくさんあるはずだ。以前より、幾何学に関心を持ち、幾何学的な観点から作曲をしてみようと思っている自分がいる。

幾何学というのはまさに建築において不可欠の領域のはずであり、幾何学的な叡智が活用された建築にはやはり学ぶべきものが多いだろう。建築を見ることに関しても、まずは直接体験を積むことを大切にしながらも、建築を見る際の観点が必要であるため、建築の理論書を購入することも検討する。

ふと、今年の春にバルセロナを訪れた際に、ガウディの建築を見て回ったことが思い出された。あの独特な建築に大いに刺激を受けたことを覚えている。これまでも絵画からインスピレーションを得て、そこから曲を作っていたことがあるように、今後は建築から曲を作っていく道も模索していこう。当面は、絵画と建築から喚起されるものから曲を作ることを意識していく。そうした実践が積み重なってくれば、この世界のありとあらゆることを題材にして曲が作れるようになってくるだろう。それは今朝最初の日記で書き留めたことと関係している。

この世界は絶えず音楽的な何かで溢れており、全ての現象の背後には音楽的な何かがある。そうした音楽的なものを知覚し、それを実際の音の形にしていきたい。ステップは2つあり、最初は全ての現象の背後に潜む音楽的なものを知覚できるようになることであり、次のステップはそれを実際の曲の形にしていこうことである。前者に関して言えば、絵画と建築という音が滲み出している領域を起点にし、まずはそれらの領域を通じて、絵画や建築を鑑賞することを通じて知覚力と作曲力を高めしていく。

こうした実践を継続させていけば、絵画や建築だけではなく、それこそ本棚やコップ、小鳥たちの鳴き声、朝日などを対象にしても音楽的なものを聴き取ることができるだろうし、それを実際の曲にすることも可能なはずだ。それを実現させていくために、弛まぬ学習と実践を続けていく。狂気を飲み干し、狂気を超えていく。

今、ゆっくりと時刻は午前6時に向かっている。辺りが少しずつ明るくなってきた。今日もまた晴れのような。午後には少々日光浴を楽しみ、昨日述べていたように、今日からは仮眠前にも一曲ほど短い曲を作る。いつもバナナ2本とバイオダイナミクス農法で作られた4種類の麦のフレークを昼食として食べているのだが、昼食後に過去の日記を編集する際には、音楽理論のポッドキャストを流そうと思う。

これは以前から夕食の準備の際に聴いていたものだが、ここ最近では聴いていなかったもので再び聴き始めようと思う。その他にも幾つか面白いポッドキャストをSpotifyを通じて見つけており、今後は過去の日記の編集の際や、夕食後に曲の原型モデルを作成する際にもポッドキャストを聴きたいと思う。フローニンゲン:2020/3/28(土)06:03

5666. デジタルアートの創作に向けて

目の前の静かな世界から、小鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。小鳥たちの睡眠を妨害する気は甚だないが、彼が夜どこで寝ているのか気になる。昨夜も満天の星空を眺めながら、小鳥たちはどこで寝ているのかを考えていた。

今日は午後に時間を作って、この秋の一時帰国のためのフライトを予約したい。一時帰国するまでまだ半年以上もあるが、早めにフライトを確保したいと思う。一時帰国のラフなスケッチを数分ほどで済ませることができたので、そのスケッチをもとに、フライトを確保する。頭とお尻については柔軟に変更が可能なので、望むようなフライトを確保することを優先させたい。

今朝方起床した時に、今後は作曲のみならず、絵画の創作にも着手してみようかと思った。これまでも水筆の色鉛筆を用いて毎日絵を描いており、描いた絵に水筆ペンで水を染み込ませ、シュタイナー教育で活用されてる滲み絵のようなものを描いてきた。それを描き始めてもう2年弱になるだろうか。

最初は色を用いず、心的空間に浮かび上がる幾何学模様をシャーペンで描いていた。そこから色鉛筆を用いるようになった。ここから絵画の創作に着手すると言っても、それは物理次元で絵を描くのではなく、デジタル空間上でそれを行いたいと思っている。絵具を購入することや描いた絵の保管が面倒であり、そうしたコストを削減する上でもデジタル上で絵画を描いていくのが自分に合っているように思える。また、いつでもどこでも絵を描きたいという思いからすると、デジタル空間上で絵を描く方が都合がいい。

最近テクノロジーの進歩のおかげか、デジタルで描かれたものでも随分と肉感があっている。現在2枚ほど原画を所有している身からすると、近くで原画を見る時に得られるエネルギーは、原画の特権かもしれないが、工夫次第ではそうしたエネルギーすらもデジタルアート上で得られるかもしれない。

以前言及したように、人類は脳や意識が大して発達していないだけでなく、身体の機能も大して発達していない。未だ人類は飯を食べなければならないし、飯の消化にあれだけのエネルギーを費やす程度の身体しか持っていないのだ。聞くところによると、人間の消化器官は牛や豚とほとんど

ど変わらないそうであり、それらの動物の臓器も移植できるということを知ったことがある——前者については確かに聞き、後者はうる覚えだが——。だが今後、人間の脳と意識、そして身体について研究が進み、テクノロジーがさらに発展を遂げれば、人間はもはや物理的な次元で生活をしなくなるかもしれないというSF的なことを考えていたのは昨日のことだった。

最初は脳だけが取り出され、身体はないが脳だけがその人の身体器官であり、バーチャル空間上に身体と意識があるような世界が誕生し始めても不思議ではない。そこからはさらに脳すらもが物理的次元で必要にならず、脳もバーチャル空間に移行する可能性がある。人間が脳も意識も身体も、全てバーチャル空間に移行し、そこでデジタル人間のような新たな種が生み出される可能性もあるのではないか。そのようなことをふと考えていた。

そうした未来を見越してのことではないが、今行っている作曲も、全てデジタル空間上で行っている。絵画に関してもデジタル空間上で行いたいと思っているのはそれが理由でもある。物理的な次元で楽譜を書いたり、絵を描いたりすると、それを保管することが手間だけでなく、他者に共有することも難しい。だがデジタル空間上であれば、保管も共有も問題ない。

デジタルアートの制作に向けて、何か良い絵画創作ソフトがないかを調べてみよう。この秋に実家に帰省した時には、デジタルアートに関心を持っている父にも尋ねてみようと思う。父も昔はエアブラシなどを使って物理的次元で絵を描いていたが、今は私と同様に、デジタル空間上での絵画創作に関心を持っているようで、父の部屋にデジタルアートに関する書籍があったように思うので、それを見せてもらうことや父に話を聞いてみよう。

毎年実家に帰省するたびに、家の中に新しいものが増えていて驚かされる。去年は、ギャッペの絨毯がリビングに敷かれていて、そこで初めてギャッペについて知った。その後、フローニンゲンに戻ってきてから、街の中心部にある絨毯屋の存在を知り、これまでもその店の前を通っていたのだが、これまでは絨毯に関心がなかったために、自分の認識空間においてはその店が存在していないも同然であった。人間の関心と知識というのは恐ろしいものである。関心がなく、知識がなければ、ある対象は存在していないも同然なのだ。

今年実家に帰った際には、何か新しいものがあるか楽しみである。そう言えば、去年は絨毯だけではなく、母がピアノを購入した。以前から電子ピアノはあったが、本物のピアノを購入したことに驚いたのを覚えている。今年はひょっとすると、父がボートを買って替え、新しいボートが実家の目の前の砂浜に置かれているかもしれない。新しいボートであれば父と一緒に釣りに出かけてみたいし、釣りだけではなく、海から見える景色を絵で描きたいと思う。その際もデジタルで。フローニンゲン：
2020/3/28(土)06:37

5667. 才能も関心も全くなかったこと

「お前は勉強と運動しかできないな」という言葉を中学校の時にある先生から言われたことをふと思い出す。時刻は午前6時半を迎え、空は薄ピンク色と水色が重なり合い、美色な世界を顕現している。

小鳥たちは相変わらず美しい合唱を奏でている。それが仮にオスたちのメスへのアピールだと分かっているとしても、むしろそれが微笑ましく、彼らの鳴き声から癒しと励ましを得ている。

中学生だった頃、ある先生から冒頭のような言葉を言われたのだが、それ以降も確かに自分は勉強と運動しかできないと思って長く人生を過ごしてきた。端的には、音楽や絵画などの芸術とは無縁の生活を送っていたように思う。実際のところは音楽も絵画も身近なところにあり、一度も触ったことはないが、家には母が昔使っていたピアノがあったし、父は会社での仕事と並行して趣味で長らく絵を描いていた。

そう考えてみると、音楽と絵画は身近なところにあっただのである。しかし、私には音楽と絵画の才能は微塵もなく、また関心もなかった。小中学校の頃に美術の時間に絵を描く際には、物理的に存在するものを模写したりするのが本当に苦手であった。ある時、風景画を描きに学年全員で海辺に出かけることがあり、その時も風景という具象物を描くことが苦手な私は、風景を見ることなくして、心象風景を描くことにした。

そう言えば、大人になってからも、例えば3年前にノルウェーのオスロの美術館に足を運んだとき、そこでデッサンの体験ができる部屋があり、デッサンを試みようと思いついたのだが、親子の石像

を見ながら、私だけが数学記号の「 Σ 」と「 ϕ 」か何かの記号を画用紙に描いてそれらの石像を表現しようとしていたことを思い出す。

才能も関心も全くなかったものが、今の自分を虜にしているというのはどういうことなのだろうか。才能も関心も全くなかったものが、自分の人生の全てを捧げてもいいものになっているというのはどういうことなのだろうか。人生というのは本当に不思議である。天職というのはひょっとすると、才能も関心も全くなかったものが、ある日を境目に突然変貌を遂げ、自分を捉えて離さないものになることによって見出されるものなのかもしれない。

振り返れば、音楽も絵画も幼少期から身近なところにあっただが、両親はそれらに自分の関心を向けるような強制を一切してこなかった。そのことに本当に感謝したい。今このようにして、音楽と絵画に爆発的な関心を示し、それらに熱狂し、自己が創作行為と一体化している状態に辿り着けたのも、一切の強制がなかったことに起因しているように思える。

今日もまた音楽と絵画の探究に専心しよう。絵画に関しては、今は作曲ノートに水筆色鉛筆で絵を描く程度であり、もっぱら鑑賞のみだが、今後はデジタルアートの創作にも着手したい。

ヨーロッパで生活を始めてから、ヨーロッパ中を旅する際には常に美術館に足を運び、これまで数多くの美術館を巡ってきたことにも何かの意味があるだろう。おそらくそれは、鑑賞のみに自己を留めるのではなく、絵画の創り手になることを導くものだったのではないかと思う。

今年も引き続き、世界の様々な美術館を巡ろうと思う。直近で言えば、4月にはオランダのピエト・モンドリアンの美術館に足を運び、5月にはアテネの美術館を巡る。夏にはスイスのベルン、アスコナ、ドルナッハの美術館を巡り、秋には日本の美術館を巡る。

日々の活動の全てを創作につなげていく。逆に言えば、大して創作につながらないようなことには一切従事しない。創作に対する靈感と刺激をもたらしてくれるものとそうでないものが存在するのは確かであり、そうでないものに関して時間を割くような愚行は決して犯さないようにする。

創ること、創ること、創ること。創ることだけがあり、創りながらにして自己と日々が新たに創られていく。フローニンゲン:2020/3/28(土)07:03

5668. 今朝方の夢

気がつくと、時刻は午後7時を迎えていた。午前4時半に起床してから今に至るまで、早朝の日課的実践を除いては、まだ日記しか執筆していない。そして今また日記を綴ろうとしている自分がいる。いつも日記の分量については何もノルマを課していない。ただ朝と夜に書くことだけを決めており、それはもはや習慣と化しており、欧州でのこの4年間は少なくとも朝と夜には日記を執筆していた。

今はもっぱら作曲の学習と実践をしたいために、日中は極力日記を書かないようにしているぐらいだが、時に書きたいことが生まれたら、その衝動に任せて筆を取るようにしている。朝と夜の日記に関しても、基本的には全て衝動的に書いている。その瞬間に湧き上がってくるものを言葉の形にしているだけだ。今朝もそのような形で言葉の形象化実践をしていたわけであるが、そうこうしているうちに午前7時を迎えていた。

日々の生活を眺めてみた時に、適度な休息を取りながらも、その休息が無駄な活動を招いてしまうことには注意しなければならない。とりわけインターネットを使っていると、無駄な情報や動画などの閲覧に向かってしまいがちなので、そのあたりは本当に注意が必要だ。休息においては、窓の外をぼんやりと眺めたり、音楽に合わせて踊ったり、短い瞑想実践をしたりするといったような事柄に従事しようと思う。

それでは今朝方の夢を振り返り、その後、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。夢の中で私は、実際に通っていた中学校にいた。どうやらこれから掃除の時間らしく、生徒たちは皆教室の机を後ろに動かし、掃除の準備を始めていた。生徒全員が教室で掃除をするのではなく、各生徒は自分の持ち場に移動し始めた。

私は教室で、小中高時代の友人(YK)と話をしていた。彼と話をしていると、2人の女性友達(MS & MH)が喋くっている私たちを注意し、早く掃除に取り掛かれと述べてきた。そこで私は友人と話をするのをやめ、渋々掃除に取り掛かろうとしたが、私は掃除をサボってどこかに行こうと思った。教室を後にし、1階に降りると、靴箱の向こう側の冷水機の周りに後輩たちがたむろしていた。

大半はバスケット部の後輩たちであり、彼らもまた掃除をサボってその場にしゃがみ込んで何か話をしていた。私は彼らに声を掛けた。冷水機で水を飲もうとすると、いつもより水の出が悪く、故障か何

かかと後輩たちに尋ねたが、それは故障ではなく水質には別に問題ないとのことだった。水を少々飲んだ後、靴箱で靴に履き替え、体育館の前を通過してグラウンドに出て行こうとした。

すると、そこで先生か誰かに呼び止められ、教室の掃除をしろと言われ、強制された掃除をするぐらいなら学校を辞めると私は述べた。私は強制された掃除ではなく、グラウンドに出て、太陽の光を浴びながら、グラウンドの雑草を自分のペースで抜きたかったのである。

体育館の前を通過してグラウンドに出てみると、グラウンドの脇の木陰で休んでいる2人の金髪女性の姿が目に入った。彼女たちはアメリカから転校してきたらしく、アメリカの学校には掃除の時間などないため、彼女たちは掃除の時間に何をしたらいいのか当惑しているようだった。彼女たちの悩みを聞こうと思って彼女たちの方に歩み寄ろうとした時に夢の場面が変わった。次の夢の場面でも、私は引き続き学校のグラウンドにいた。

だが時間帯も状況も先ほどの夢とは違っていた。どこか秋に向かっていく日の朝の清々しさがそこにあった。グラウンドで私は、青年時代に流行していたあるJ-POPの曲を替え歌にしながらか持ちよく歌っていた。その歌を聞いている人たちが周りにいて、彼らは友人だけではなく、見知らぬ人もいた。私が原曲の歌詞をその場で見事に替え歌にしていく様子を周りの人たちは驚いていて、同時に彼らはそれを大いに楽しんでいるように思えた。フローニンゲン:2020/3/28(土)07:25

5669. 自我の特性: 日本へのフライトを予約して

時刻は午後8時を迎えた。今宵も空には星が見え、三日月も見える。

夕食を摂っている最中にふと、自我の特性について考えを巡らせていた。私たちの自我は、この世界のごくわずかな一部に私たちを固着させる。自我には狭い認識の枠組みが備わっており、自我はそれを通して世界を捉え、狭い景色に私たちを貼り付ける。自我はそれによって自身の生存を維持させているのだ。

このリアリティは、自我が私たちを固着させた点よりも遥かに大きな広さを持つ。私たちは絶えず自我を通して見えた点の世界の中を生きているということを忘れてはならず、その点の外側には無限の広さを持つリアリティが広がっていることを忘れてはならない。

本日の午後、無事にこの秋の一時帰国のフライトを確保することができた。毎年のことだが、なぜかベネルクス三国の地域から日本に帰るときのフライトの値段は安い。ビジネスクラスが往復25万円という破格の値段で予約できてしまうほどなのだ。

他の地域と比較して航空券の価格が安いのがなぜなのかよくわからない——イタリアからだとかベネルクス三国と同じぐらいの価格だが、英国、フランス、ドイツからだとか35万円ほどだ——。ベネルクス三国の次に安い地域はフィンランドだが、試しに地域設定をフィンランドにしてみても予約をしてみると、オランダからの方が安かった。オランダからフィンランドを経由して日本に行く便よりも、フィンランドからは日本に直通で行ける便の方が安いのはなぜなのかいまだに謎である。前者は2回飛行機に乗り、そのうちの1つは全く同じ航空会社のフライトなのに。

これまで数年間はJALにお世話になっていたが、今回は世界の様々な航空会社のビジネスクラスを比較してみたく、行きはブリティッシュ・エアウェイズ、帰りはフィンエアーを利用することにした。ビジネスクラスの比較に関する情報は巷に溢れており、それらの2社も例外ではなく、巷の情報ではフィンエアーの方が質の高いサービスを提供しているようだ。だがこれも自分で直接体験してみないとわからないため、行きと帰りで航空会社を変えた。

最初は今年もJALにお世話になろうと思っていたが、JALの場合、東京行きの便(フィンランドから日本に帰る場合、4月からは成田ではなく羽田に到着するそうだ)しかなく、今回は関空をどうしても利用したいと思っていたことも航空会社を変えた理由である。

東京に特に用事がないのと、できるだけ東京に近づきたくないという理由から関空を利用することにした。また、今回は福井県と石川県に行く旅を計画しており、両県に対しては関空からの方が圧倒的にアクセスがいい。さらには、帰りに関しても山口県の実家から成田まで行くのが面倒であり、毎年成田空港近くのホテル日光成田に宿泊していたが、今回かはら関空近くのホテルに宿泊することにする。結局今回はフィンランドに前泊することなく、行きは直接関空に向かおうと思う。

アムステルダムを出発し、フィンランドに向かう便は昼前のものであり、それであれば前泊は必要ない。いつも行きに関してはほとんど疲れを感じない。問題は帰りである。日本からフィンランドを経由してアムステルダムに到着するのは、大抵夜の6時半ぐらいであり、そこからフローニンゲンに向け

て3時間弱列車に揺られるのが辛い。そうしたことから、今回は帰りに関してはスキポール空港内のホテルに2泊し、翌日に丸一日アムステルダム美術館を巡ることにした。

4年ぶりに、レンブラント美術館とアムステルダム国立美術館に立ち寄ろうと思う。日本からの帰りはスキポール空港内のホテルに直行し、すぐに休んで、次の日を全て観光に充てる。そこでまた一泊し、万全の体調でフローニンゲンに戻る。こうした体調管理をもう始めていこうと思う。体脂肪を含めて身体年齢は相変わらず17歳のままだが、それでも疲れを身体に溜めないようにする。

今回の一時帰国は合計で3週間ほどであり、ホテルに関してはまた後日予約をしようと思う。その際には、溜まったマイレージを活用しようと思う。とりあえずフライトを抑えることができ一安心である。フローニンゲン:2020/3/28(土)20:33

5670. 加藤家のルーツを辿る旅

時刻は午前7時を迎えた。今日からサマータイムに入ったこともあり、昨日の時間で言えば今は午前6時ということだ。早いもので今年もまたサマータイムの時期となった。確かにここ最近日は昇るのが早くなり、日が沈むのが遅くなった。また、晴れの日も増えてきたことも季節の変化を予感させている。一方で、気温に関しては相変わらず低く、今日は最高気温が6度までしか上がらず、最低気温は0度である。明日は最低気温がマイナス2度とのことである。依然として寒さ対策が必要である。

昨日に、この秋の一時帰国のためのフライトを確保することができたことを書き留めていたように思う。とりあえず望むようなフライトが抑えられたことは嬉しい。アムステルダムからロンドンを経由するよりも、本当は行きも帰りもフィンランド経由の方が望ましかったが、航空会社を比較するという観点において、結果として行きはロンドン経由、帰りはフィンランド経由で良かったように思う。

これまでの8年間において、日本に一時帰国する時は常に成田空港を使っていた。だが今回からは関空を利用することにした。その理由としては、特に今回は東京に立ち寄る必要もなく、また東京とは今後しばらく距離を取り、自分の内側で東京に対するイメージや感覚がどのように変化するかを観察したかったということがある。その他の肯定的な理由としては、今回は福井県と石川県に立ち寄りたいと考えていて、関空からの方がそれらの県へのアクセスが良かったことである。

昨年日本に一時帰国した際に、実家で両親から加藤家のルーツの話聞いた。両親は夫婦共に加藤という姓を持っているのだが、父と母の「加藤」という名前のルーツはどうやら違うようだ。

父方の加藤家の家紋は「下がり藤」であり、石川県にゆかりがあるらしい。一方で、母方の加藤家の家紋は「上り藤」であり、福井県にゆかりがあるとのことであり、自らのルーツを辿る意味で両県に足を運んでみようと思った。2つの県を訪れた記憶は過去になく、今回が初めてかもしれない。今回の帰国を通して自らのルーツを辿ることによって、また何か新しい発見があるだろう。また今回の一時帰国は、日本の再発見をもたらしてくれるはずだ。

今回は上述の通り、福井県と石川県を訪れることを主目的にしているが、加藤家の歴史がわかる博物館が史料館があるわけでもなく、単純に両県に足を運び、それらの県の空気を吸い、雰囲気を感じるだけで目的である。それに付随して、小さな美術館をいくつか巡ろうと考えている。そうした理由以外には、運転免許の更新もある。最後に車を運転したのは今からもう15年近く前の卒業検定の日であり、それ以来一度もハンドルを握ったことがない。

車を所有する必要性をこれまで感じたことはなく、アメリカで4年間生活している時でも、カリフォルニアでは自転車でも十分であり、ニューヨークでは徒歩でも十分だった。今も車を必要としておらず、今後も車を運転する気はないが、運転免許の更新は念のため行っておく。

今後フィンランドで生活することになれば、その時は郊外に居を構えることを考えていて、その際には車が必要になるかもしれない。そういえば、先日隣の家の前を通った時、近所のスーパーのトラックが家の前に止まっていて、食糧の宅配をしていた。コロナウイルスの蔓延によって、そのようなサービスがあることを初めて知り、そうした宅配サービスがあれば、今後郊外で生活するようになって車はいらないかもしれないと思った。そのようなことを考えていたことを思い出す。フローニンゲン:2020/3/29(日)07:26

5671. 構成概念の奴隷とAIの奴隷: 人生の有限性

時刻は午前7時半を迎えようとしている。今、小鳥たちが高らかに鳴き声を上げている。彼らにはサマータイムという概念はないであろうから、別に昨日と今日とで何かが変わったわけではない。変わったのは私たち人間の方である。サマータイムというのも構成概念に過ぎないのだが、それに

よって私たちの認識や生活のあり方が変わってしまうことは、面白くもあり怖くもあることである。人は構成概念に左右されすぎなのだ。

構成概念で作られた虚構の世界の外に出ること。そうした外の世界の広大さの中で自由に自らの人生を生きること。それができている人はほとんどいない。大抵の人は、構成概念に隷属し、構成概念の奴隷なのだ。虚構の世界の奴隷であり続けることをいつまで行うのだろうか。

そういえば昨夜、人類の大半は今後、AIの奴隷として生きることになるのではないかと考えていた。厳密には、大半の人類がAIの奴隷として生きる時代がしばらく続き、その後はそうした奴隷が淘汰されていくような時代がくるのではないかと考えていた。そうした「時代」と述べたが、それは今からもっとずっと後の話である。AIと共存し、AIを活用する側に回る人間たちと、そうした人間とAIに活用される奴隷のような人間が生まれてくる世界が想像できる。それはさながら新たな奴隷制度である。

そうした時代の初期においては、AIの世話役として、コンピュータールームの管理や掃除などをする人がいて、しばらくすると、そうした人間すら必要としなくなる時代がやってきて、彼らは淘汰される。もしかしたら、現在プロフェッショナルな仕事として認められているプログラマーがAIの奴隷となり、AIのバグの掃除などをし始めたりもするかもしれない。そのような未来図が脳内に浮かんできたのは昨夜の就寝前のことだった。

そこからはまた、日本の一時帰国について考えていた。今回は、加藤家のルーツを辿るためと免許の更新以外に一時帰国する大きな理由はなかった。残りの人生において、あと何回日本の大地を踏むことができるのかと最近よく考えるようになった。もうそれは数えるほどであり、そのカウントダウンが始まっている。それはすなわち、両親と直接会って話をする機会も数えるほどになっていることを意味している。今後は少しずつ毎年日本に帰ることはなくなっていくかもしれない。そのように考えてみると、日本の大地を踏み、日本の空気を吸うこと、そして両親と会って話をすることはもう限られていることがわかる。

人生は本当に有限なのだ。私が生きている間には、おそらく脳・意識・身体が全てデジタル空間に移行する日は来ないかもしれない。意識は元々非局所性を持っているが、脳と身体は依然として物理的な制約によって制限されていたが、今後いつか脳と身体もそうした制約から解放される日が

くるだろう。それがいつかはわからないが、そうした日がいつかやってきて、その頃には人類は随分違った生物になるのではないかと思う。その時の人類の世界はどうなっているのだろうか。

意識が誕生した瞬間に成人の人間や老人の人間も生まれてくるだろうし——作れるだろうし——、生まれた時から尋常ではない知性や能力を持った人間も生まれてくるだろう。そのような世界の中で、人類の多様性はどうなっているのだろうか。彼らの倫理観や道徳観、そして霊性観はどのようなものなのだろうか。ゆっくりとだが着実に変化していく自己と世界。これから自己はどこに向かい、世界はどこに向かうのか。その方向性を規定している力の所在が知覚されるようになり、そうした力に対して敏感に反応し始めている自分がある。フローニンゲン:2020/3/29(日)07:45

5672. アートの国オランダにやって来て

アートの国オランダにやって来た意味と、そこで生活を営んでいることの意味。それについて昨夜少しばかり考えていた。

私が住んでいるオランダ北部の街フローニンゲンの駅にはないが、近くのズヴォレという街の駅にはグランドピアノが置かれている。ズヴォレには移民局があり、そこを訪れるためにズヴォレの駅に何度か立ち寄ったことがある。その時に、駅構内にあるピアノを演奏している子供や大人がいたことを覚えている。オランダ人にとっては音楽が身近なものなのだろうが、それよりも彼らにはとっては絵画の方が身近にある。

これまでの日記にも書き留めていたように、オランダ人の家にはどんな家でも必ず絵画がある。学生が住むような家にさえ、必ずと言っていいほど絵画が備え付けられているし、オフィスには当然何かしらの絵画がある。私の家にも備え付けの絵画が5点ほどあり、自分のコレクションの3点の絵画を加えれば、合計8枚の絵画に囲まれて暮らす生活を今営んでいる。

今から3年前に、国際非線形ダイナミクスの学会に参加するためにザルツブルクを訪れた際に、学会の内容とは全く関係ない啓示を滞在最終日に受けた。それは自分を作曲に向かわせた啓示であった。その啓示を受けて以降、学術研究と並行して、ゆっくりとだが作曲に関する勉強を始めた。今は1日の時間のほとんどを作曲の実践に充てている。曲を作っている時間は5時間半から6時間とそれほど多くないが、曲の原型モデルの作成に1時間半ほど充てていたり、それ以外の時間にも絶

えず音楽的な何かに無意識が向かっていることを考えると、四六時中作曲の世界に在ると言えるかもしれない。

ここ最近、作曲だけではなく、絵画の世界にも関心を持っている。以前から絵画の鑑賞は積極的に行っていたが、現在のもっぱらの関心は自らが絵画の創り手になることである。昨夜も就寝前に、デジタル空間で絵を描くことについて考えていた。私には絵画の才能がなく、絵画の教育も一切受けていない。それは作曲においても同様だ。しかしながら、そうした状態で作曲を初めてみて思ったが、才能がないこともまた一つの才能であり、伝統的な教育を受けていないことは救いでさえあると思った。

絵画に関して言えば、具象物を描く場合であれば、私は幼児が描く絵ぐらいしか描けない。だが逆に考えれば、幼児のような絵を描ける才能が自分にはあるのではないかと思ったのが、昨夜の就寝前のベッドの上での出来事だった。

小学校や中学校に進学してからも、いつまでも幼児のような絵を描く能力しかなく、逆にそうした能力を発揮して生まれた絵を友達に見せて笑わせていたことを思い出す。結局私は、自分の創造物を通して、人を笑わせたり、喜ばせたりしたいのだということに気づく。そうした原体験が幼少期の頃にたくさんあったのだ。

絵を描いてみようか。デジタル空間内で絵を描いてみようかという気持ちが芽生えてくる。

アートの国オランダにやって来て、アートに囲まれながら生活をしている自分。この国に自分を運んできたものと、この国を1つの永住先にしようと思わせてくれたものの背後には、アートに関する何らかの事柄がある。その1つの現れとして、今自分が絵画の創り手になろうとしていることがある。作曲と絵画。それら2つの道を自分なりに歩んでみようかと思う。フローニンゲン:2020/3/29(日)08:09

5673. 絵画の創作に向けて:今朝方の夢

小鳥たちの大合唱に耳を傾けながら、今再び日記を綴っている。昨日に引き続き、今朝も日記を綴る時間が長い。とにかく自分の内側から外側に出てこようとしている言葉に形を与えること、そして同様に外側に出てこようとしている音に形を与えること。それを継続させていく。今後はさらに、言

葉や音だけではなくて、内的イメージも加えていこうかと考えている。その実践がまさに絵画の創作である。

絵画の創作といっても立派なものでもかしまったものでもなく、デジタル空間上で好きなように絵を描くだけである。自分の内側に絶えず生起している抽象的なシンボルやイメージの流れ、さらには想像上の生物などを描いていこうかと思っている。

作曲と同様に、いついかなる時でも絵を描けなければ自分にとっては意味がなく、そうしたことから時間と場所を選ばないデジタル空間で絵を描くことに関心が向かっている。文字通りにこの世界のどこにいても絵を描くために、タブレットで絵を描いていこうかと考えている。そうなってくると、iPadなどのタブレットの購入を検討する必要があるが出てくる。デジタル空間でイラストを制作するためのソフトについて調べ、タブレットについても近々調査してみようと思う。

ここからの人生は、言葉、音、イメージ(絵)だけを探求したものになる。人生がそれらの中にあり、人生はそれらに溶け出していく。生み出された曲や描かれた絵を通して、その人の内面世界を知りたいと思う自分がいることに昨日気づいた。音楽や絵画は多くを語らないこともあれば、全てを語り切ることもある。

音楽と絵画を通じて人々と深く交流したいという思いを持ち始めている自分がいる。そのために何をすればいいのかは明確ではないが、少なくとも今のように日々曲を作り続け、今後は絵を描くことにも挑戦したいと思う。

今日は曇りの予報だったが、早朝の今は空が晴れている。空にはポツリポツリと雲が浮かんでいて、それが気ままにどこかに向かってゆっくりと流れている。あの雲のように生きていこう。そのようなことを思う。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、オフィスビルのような建物の中にいた。そのビルがある場所は、ヨーロッパのようでもあり日本のようでもあった。半欧半日の雰囲気があるところに流れていた。ビルの1階は少し薄暗く、1階のロビーには巨大なスクリーンがあった。それは窓ガラスに立てかけられていた。いや厳密には、窓ガラスそのものがスクリーンであり、そこにニュースか何かの映像が映し出されていた。スクリーンを眺めていると、1階にたくさんの人が集まり始め、全員

が整列を始めた。列は瞬く間に3列ほどになった。3列の前に1人の男性が立っていて、その男性が、それらの列は人を所得順に並べたものであると述べた。気がつくとも私も列に並んでおり、真ん中の列の前の方にいた。

3列の中で所得の高低は関係ないようであり、だが何かの基準で3つの列に分けられていた。すると、左の列の一番前のメガネをかけた中年男性が、一番右の列の一番後ろの男性に何の仕事をしているのかを日本語で尋ねた。それを尋ねた中年男性は、別に所得の低さをどうのこうの言うためではなく、彼の仕事内容を把握することによって、これから対話を深めていくためにそのような質問をしたようだった。質問された右列の一番後ろの人は、見た感じ東南アジア出身の男性のようであり、無職のようだった。しかし、彼は日本人であり、千葉の工科大学を卒業し、今は工場で勤務しているとのことだった。その返答を受けて、質問をした中年男性は黙って何かを考えていた。大学を卒業したにもかかわらず低賃金で働かされている社会の有り様について何かを考えているようだった。

その後、目の前の巨大なスクリーンを使ったシミュレーションが始まった。それは人間の行動に関するシミュレーションのようでもあり、それに紐づいたカネの流れのシミュレーションのようにも思えた。スクリーンに映し出されたシミュレーションの図において、横軸は時間を取っていることは明らかだったが、縦軸は何を取っているのかがいまいちよくわからなかった。ただし、非線形的な動きを見せるいく筋かのデータの動きの中に固有のパターンを見出している自分がいて、データの波形が描く軌道の美しさに恍惚感を感じて笑顔になっている自分がいた。フローニンゲン:2020/3/29(日)08:32

5674. デジタルアートの創作に向けて: iPad Proの購入の検討

時刻は午後9時を回ろうとしている。今週末もゆっくりと終わりに近づき、明日からはまた新しい秋を迎える。今日からサマータイムに入ったということもあって、もう夜の9時を迎えようとしているのだが、まだ外は明るい。ちょうど今、フローニンゲン上空の空はエメラルド色に輝いている。

今日は午後時間に時間を取って、デジタルアートの創作に向けた調査をしていた。どうやらiPad Proを使い、「Procreate」や「CLIP STUDIO PAINT」というソフトを用いれば簡単にデジタルアートが作成

できるそうだ。iPad付属のApple Pencilの書き味もいいらしく、デジタルアートの創作に向けて道具を揃えようかと思う。

原画を見ていていつも思うのは、その肉筆感が素敵であり、そこに生身の人間が描いたという肉感が宿っている。そうしたことから、油絵のようなものを描きたいと思っていたところ、例えば「Art set 4」というアプリを使えば、本物と見間違ふかのような油絵がデジタル空間上で描けることを知った。もちろん、ProcreateやCLIP STUDIO PAINTでも油絵が描けるそうであり、iPad Proを用いればデジタルアートの創作に乗り出していけそうだという嬉しい目処が立った。

今の私の関心は、目に見えるものを描くというよりも、心の中にある目に見えないものを描くことに関心がある。言い換えれば、心の眼で知覚されるものを描いていくことに関心を持っている。もちろん、日常の何気ない風景や旅先の風景などを描きたいという思いもあり、食わず嫌いをせずに、肉眼で捉えられるものと心眼のみで捉えられるものの双方を描いていきたいと思う。

iPad Proの購入を真剣に検討しよう。一時帰国の際に日本で購入するまで待てず、来月か再来月かのどこかのタイミングでiPad Proを購入したい。

日々の作曲実践と合わせて、絵を描くことを始めれば、日常がますます充実したものになるに違いない。今後の旅もより一層充実さが増すであろう。旅の最中においては、旅を通じて喚起されるものを音や絵にしていく。それを実現することができればどれだけ楽しいだろうか。

デジタル空間上に美術館とコンサートホールを建築していこう。そこに自分の絵を飾り、自分の曲を流す。デジタル空間上であれば、ひよっとすると、他者と比較的簡単に協働して絵を描くこともできるのではないだろうか。文通のように、絵のファイルを交換し、お互いに少しずつ絵を描いていくこともできるだろう。これに関して言えば、作曲も本来可能なはずだ。ただし作曲については少しばかりハードルが高いかもしれない。絵であれば、何かしらのものを誰でも描けるはずであり、今後は誰かと絵を一緒に描いてみるのも楽しそうである。その前に、まずは自分が絵の修練を積んでいこう。

作曲実践と同じく、毎日楽しみながら絵を描いていく。近々iPad Proを購入し、フローニンゲンの街を散策しながら絵を描いたり、旅先の美術館で特定の作品から喚起されるものを自分なりの絵にしていくことなどを行ってみたい。

作曲実践に関して明日から意識して試したいことは、手元に画集を置き、ある特定の画家の作品を見て、その作品から喚起されるものを曲にしていくことである。まずは誰か特定の画家の好きな作品を何度も繰り返し鑑賞し、その都度喚起されるものを曲にしてみるのもいいかもしれない。手元に画集は豊富にあるが、どこかのタイミングで街の中心部の行きつけの古書店Isisに立ち寄り、そこで画集を購入しようと思う。

絵画の創作を始めようと思いついたことによって、世界がまた明るくなり始めた。そして自分の内面世界がより広く豊かなものに向かいつつあるのを実感する。フローニンゲン:2020/3/29(日)21:10

5675. 1日の活動時間の見直し

時刻は午前6時を迎えた。昨日からサマータイムとなり、サマータイム前の時刻で言えば、今は午前5時ということになる。サマータイムに入ったばかりのため、辺りはまだ暗く、小鳥たちの鳴き声もまだ聞こえてこない。彼らが鳴き声を上げるのはもう少ししてからだろうし、朝日が昇り始めるのも今しばらく後だ。

メスたちに自分の健康状態をアピールするために鳴き声を上げ始めるオスの小鳥たちよりも早く起きている自分は一体何なのだろうと可笑しくなってしまう。自分は彼らの存在を見守る者だと認識しておこう。

今の気温は1度とのことであり、気温は低いですが、ここ最近はまだ日中のみならず朝にヒーターをつけることもなくなった。日中に太陽の光がたっぷりと部屋に差し込むことによって、部屋が暖かくなっているようなのだ。そのおかげでヒーターをつけることはなくなっている。ただし、就寝中には湯たんぽを使っており、起床してから午前中の活動に従事している際にもお腹に湯たんぽを忍ばせている。例年の傾向で言えば、やはり5月ぐらいまでは湯たんぽを使って寝ることになるかと思われる。湯たんぽのおかげで腸が活性化し、喜んでいることがわかる。お腹を温めることによって腸がより健康になり、それが心身の健康を根底から支えている。

4月の初旬に書籍を大量注文し、それらが届くまでは今は読書から少し離れている。そのおかげで作曲実践に打ち込む時間が増えているのは喜ばしいことである。とは言え、作曲ばかりをしているわけではないので、作曲に充てることができるのは5時間半から6時間ほどであり、曲の原型モデル

の創作の時間などを含めると、音楽に向き合っているのは合計で7時間から7時間半ないしは8時間ほどだろうか。

今後はもう少し作曲に時間を充て、理想は8時間ぐらい曲を作り、作曲関連の学習や原型モデルの作成を含めると、9時間から10時間ぐらいを確保したいところである。それぐらいの時間であれば全く無理がなく、程よい程度の実践量かと思われる。私は自分に負荷をかけ過ぎる傾向があり、以前の自分であれば、作曲に12時間ぐらいを充てようとしていたのかもしれないが、その2時間の負荷量は大き過ぎるように思える。

ロサンゼルスで生活していたときは2つの仕事を掛け持ちしていたため、学習に割ける時間がほとんどなく、学習時間の管理をよく行っていた。休日は近くのカリフォルニア大学アーバイン校の図書館に行くのが楽しみであり、休日の学習時間は12時間から13時間ぐらいであり、12時間を超えてくると集中力が下がってしまう自分に気付いていた。その時間を超えて学習しようとする、脳がパンクしてしまうかのようなのだ。自分はそれぐらいの脳の容量しか持っていないことを考えると、学習や実践の最大時間数は12時間から13時間ぐらいなのだと思う。今は読書だけをしているわけでも作曲だけをしているわけでもないので調和がもたらされており、トータルの学習・実践時間が15時間を超えても何の問題もなく、1日に自らの取り組みだと思っているものには15時間以上の時間を投入しているように思える。

今日からは作曲実践にももう少し時間を充てるため、日記の編集は夕食後に行うようにする。作曲ソフトのMuscore上に作った曲を投稿した後に日記の編集に取り掛かる。これまでは日記の編集は、昼食後に行っていたが、昼食後の時間はフーガの学習と実践に充てたい。そこで1つか2つほど曲を作った後に仮眠をし、仮眠から目覚めた後に日光浴をしてからまた作曲に取り掛かるというリズムを作っていこう。このように、日々の時間の使い方についても微調整をし、色々と試す中で新たな習慣を確立していこうと思う。フローニンゲン:2020/3/30(月)06:26

5676. 『如水会々報』と油絵

この8年間の欧米生活において、卒業した日本の大学の会報誌『如水会々報』には毎月お世話になっている。この8年間、私が世界のどこに住んでいても、毎月それを自宅に届けてくれている如水

会にはとても感謝している。これまでサンフランシスコ、ニューヨーク、ロサンゼルス、フローニンゲンで生活してきたが、世界のどの都市に住んでいても毎月無料で会報誌を届けてくれているのだ。

アメリカ時代においては、井筒俊彦先生の『意識と本質』とケン・ウィルバーの『存在することのシンプルな感覚』ぐらいしか日本語の書籍がなく、毎月文字として日本語に触れるのは如水会々報を通してだけだった。そのような生活をアメリカで4年ほど送る中で、如水会々報を読むことは私にとって大きな楽しみであり、心の支えになっていたとすら言える。

そんな如水会々報の最初ページには、諸先輩方が描いた油絵—アクリル絵の時もあるかもしれない—が掲載されており、それがとても印象的である。毎回掲載されている油絵を眺めることもまた1つの楽しみであり、今月号に掲載されている油絵もぼんやりと眺めて楽しんでいた。

昨日の日記で書き留めていたように、近々、日記の執筆や作曲だけではなく、自分の内的感覚を言葉や音以外の方法で、つまり絵の創作を通じて形にしていきたいと思う。それらは全てデジタル空間上で行おうと思う。

調べてみると、リアルな油絵を描けるソフトがあるようなので、それを用いて油絵を描いていきたいと思う。まだデジタルアートの創作に向けた道具、すなわちiPad Proを購入していないのだが、もう頭の中では何を題材にしてどのようにデジタルアートを描いていくかの構想がある。小さな目的で言えば、上述の通り自分の内側の感覚を絵にしていくことによって、感覚世界を拡張させ、さらに豊かなものにしていくことだが、それ以外の小さな目的は、そのような形で絵を描き、それを他者に共有することで、自他の内的世界の治癒と認識空間の拡張を促すことがある。そのような小さな目的のようなものはあるが、治癒と変容を度外視して純粋に絵を描くことを楽しみたいというのが一番だろうか。

今のところデジタルアートの題材は、日常の景色や風景と、純粋に自分の内側の内的感覚の2つがある。前者に関して言えば、日々の生活の中で写真を撮影し、その写真をもとに油絵を描いていく。その絵から喚起された内的な感覚やビジョンをさらにもう1つの絵にすることは後者の題材とも関係している。後者に関しては、その瞬間の内的感覚に意識を向け、それをそのまま絵として形に表現してみるのもいいだろう。そうした2つの異なる題材と異なるアプローチで油絵をデジタル空間上

で描いていこう。さらには、過去の偉大な作曲家が残した曲を聴いて喚起されたものを絵にしたり、好きな画家の作品に喚起された内的感覚やビジョンを絵の形にするのもいいだろう。そのように考えてみると、描く題材は本当に事欠かない。

旅に出かければ、絵画の題材が自分の内側から溢れ出してくるだろうし、無限のインスピレーションが得られるだろう。作曲に加えて絵画の創作を始めれば、日々の生活がさらに彩り豊かなものになっていくと思われる。フローニンゲン:2020/3/30(月)06:44

5677. 言葉・音・絵(イメージ)を通じた内的リアリティの創造に向けて

言葉、音、絵(イメージ)。それらはこのリアリティを構成する三大要素のようなものと改めて思う。言葉を通じた日記の執筆、音を通じた作曲実践以外に、私が絵画の創作に関心を持ったのは、絵(イメージ)というものがリアリティを構成する上で大きな役割を担っているからなのではないかと思ったからである。それともう一つ、言葉、音、絵を通じた創作に駆り立てているのは、時代精神と目には見えないシステムへの対抗ないしは反抗のようなものもあるかもしれない。時代精神や社会のシステムに隷属した形で、すなわち外側から自分のリアリティを構築するのではなく、自分の内側から自分のリアリティを創造したいという衝動が自分の内側にあるようなのだ。

もちろん、1人の人間としてこの世界で生きていく中で、時代精神や社会のシステムから完全に切り離されることはなく、それらに影響を受けながらもうまく付き合っていく必要がある。だが決してそれらに隷属してはならず、それらに自分のリアリティを制限させてはならないように思う。

自らのリアリティを自分自身の言葉・音・絵を通じて創造していくこと。その取り組みにこれから本格的に乗り出していきたい。

今後AIがどれほど発展し、それとどのように人類が付き合っていくのかに関心を持っている自分がある。以前から小説を生成するAIや、作曲を行うAIもいる。だが、アートの世界の最後の最後の部分は、AIが得意とする計算を超えているものなのではないかと思う。絵画に関して言えば、ひよっとすると、肉眼で捉えられるものについてはAIも随分と上手く描くことができるかもしれないが、心眼で捉えられるものについてはAIは不可侵なのではないかと思われる。仮にそれが部分的に行えるようになったとしても、心眼を持つ画家の絵には到底敵わないだろう。

作曲に関しても、1つの音から次の音へ進むパターンは無数にあり、計算量が爆発してしまい、量子コンピューターでもその計算量には苦戦させられるだろうし、仮に計算ができたとしても、それがきちんとした音楽作品になるかは疑問が残る。

これから一生涯かけて作曲や絵画の創作に取り組んでいこうと思っているのは、上述のように、時代精神と時代のシステムに対決・対抗するという側面のみならず、AIの台頭によって浮上してきた人間とは何かを突き詰めるという意味もあるように思う。端的には、アートを通じて、AIにはできないことは何か、人間にしかできないことは何かを探求したいと思っている自分がいるようなのだ。

AIには想像できないような一筆を描き、一音を置く。そのようなことを意識して、今後も自分の内的感覚及び感性を育んでいく精進を続けていきたい。そのために必要な直接体験は何でも積み、学習と実践を怠らない。

時刻は午前7時を迎え、辺りは薄明るくなり、小鳥たちも鳴き声を上げ始めた。今日は午前中に小雨が降るようだが、午後にはそれが止み、今週もまた晴れの日が続くとのことである。

春だ。春がやってくる。春がもうすぐやってくるのだ。

春がやってきた頃に、オランダの国内旅行がてら、ピエト・モンドリアンの美術館に足を運ぼう。5月末にはアテネにも行く。その頃のフローニンゲンはまだ寒さが残っているだろうが、アテネはきっと初夏の様相を呈しているだろう。夏にはスイスの避暑地に行き、そうこうしているうちに日本への一時帰国の日がやってくるだろう。フローニンゲン:2020/3/30(月)07:06

5678. 絵画作品を基にした作曲実践：ハーモニーの学習の進展

時刻は午後8時を迎えた。今、フローニンゲンの上空に鮮やかな夕焼けが広がっている。

思い返してみれば、今日は午前中に小雨が降り、午後には少しだけ天気雨が降っていた。夕方から今にかけて空は晴れ渡り、今日もまた日光浴を少しばかり楽しむことができた。今夜の気温はマイナス2度に到達するようだが、今週末には気温が上がり、来週の月曜日には最高気温が18度に達するようである。フローニンゲンは、このように少しずつ暖かい気候に向かっている。

今日はゴッホの『ひまわり(1889)』を参照し、そこから喚起されるものを曲にした。明日はモネカルドンの作品を参照しよう。絵画作品から得られる作曲上のインスピレーションはとても大きい。日常のありとあらゆることを題材にして曲を作っていく際に、絵画作品というのはインスピレーションの大きな源泉である。毎日少なくとも1つの絵画作品に対して曲を作っていくようにしたい。それもまた1つの習慣とする。

本日ふと、少しずつ楽譜を通して作曲家と対話ができるようになってきた自分がいることに気づいた。これは嬉しい気づきである。楽譜を眺めていると、その曲の背後にある隠れたメッセージのようなものに気付くようになっていく。もちろん、まだ作曲家の真意の深くには至っていないが、何かしらの意図のようなものは確かに感じる。そして時に、その作曲家の内的感覚がトレースされるかのように自分の内側で再体験されることがある。これが一度起こってしまうと、その体験は脳の神経ネットワークに埋め込まれ、その体験の前のように曲が聴けなくなる。すなわち、ひとたび隠れたメッセージを発見したり、作曲家の内的感覚を追体験すると、そのメッセージと感覚を脇に置いて曲を聴くことはほぼ不可能になるということである。

現在、ウォルター・ピストンの“Harmony”という書籍を参考にしてハーモニーの学習と実践を進めている。本書は600ページ弱ほどの分量があるが、少なくとも連続で2回転か3回転させようと思う。本書はハーモニーに関する網羅的な書籍であり、ハーモニーに関する数多くのパターンを学習することができる。本書はまるで、受験数学における青チャートのような書籍である。

本書を2回転か3回転した後、秋の一時帰国を目処にショーンバーグが執筆したハーモニーに関する書籍を参考にし始める。こちらも中身は濃いですが、上述の書籍に比べて軽いため、一時帰国の際に携帯しやすい。ショーンバーグのこちらの書籍に対しても繰り返し譜例を参考にして曲を作っていく。その後、作曲技術の応用的な手法を身につけるために、バルトークやメシアン作曲技法に特化した書籍を参考にする。それらはさながら分野別対策の数学問題集か大学への数学シリーズのようなものだろうか。それ以外にも、現在ゆつくりとフーガの技法に関する書籍を参考にしている。こちらはアルフレッド・マンが執筆したものだ。

本書も何度か繰り返し学習し、その後にはウォルター・ピストンが執筆した対位法の書籍を参考にしたい。本来であれば、対位法を学習した後にフーガの学習に移行するのが一般的な流れかもしれない。

ないが、まずはフーガについて感覚的に慣れ、その後に対位法の学習をしてから再びフーガの学習に戻ってきたいと思っている。フローニンゲン:2020/3/30(月)20:32

5679. 瞑想実践としての作曲と絵画の創作

今朝は午前5時に起床し、今は午前6時を迎えた。サマータイムに入ったこともあり、まだこの時間帯は辺りが暗い。そんな中、寝室から窓の外を見た時に、街の中心部にある教会がライトアップされていた。教会の片側だけが黄金色に輝いており、早朝の時間帯にあのように輝いている教会を初めて見た。毎日あのようにライトアップされているのだろうか。それとも今日は何か特別な日なのだろうか。

今の外気はマイナス2度と低い、室内はそれほど寒さを感じない。もうヒーターをつけることなく過ごすことができている。これも日中の太陽光のおかげである。それによって部屋が暖かくなっているのだ。とはいえ、今も湯たんぽをお腹に忍ばせながらこの日記を書いている。就寝時と起床直後に湯たんぽを使うことはまだしばらく続くだろう。

そのように思っていたが、来週の月曜日から気温が上がるようであり、最低気温も10度近くまで一気に上がる。フローニンゲンで生活をして4年ほど経つため、その経験からすると、ここで一度暖かくなり、また気温が下がるという傾向があることを知っている。いつかほど春の暖かさを感じ、そこから5月末まで寒さが残り、その後によりやく暖かくなってくる。そのような傾向があるかと思う。

昨日、リズムやメロディーはどこから降ってくるのかについて考えていた。作曲上、やはり良いリズムを持ったメロディーを生み出すことが一番難しいと言えるかもしれない。リズムだけが生み出されても、それが良いメロディーになるとは限らないが、メロディーの構成要素としてリズムは不可欠のため、良いリズムの条件とその創出方法に関心がある。そもそもリズムとは何なのか。そのあたりの哲学的探究をしていきたい。そうした探究はもちろんながらメロディーに対しても行いたい。良いメロディーがいきなり生まれてくることに越したことはない。そのため、リズムからメロディーを創出していく道と、メロディーをいきなり創出していく道の双方を探っていこう。

日々作曲やノートに絵を描いていると、脳の状態や意識状態の観点からすれば、作曲や絵画の創作は瞑想実践と同様の働きを持っているものなのではないかと気づいた。もちろん相違点も様々あるが、意識変容作用に関して同じような効果がありそうだとということがわかる。

作曲に従事している最中や絵を描いている最中には、ある種の瞑想状態となり、言語を司る脳の働きが抑制され、それ以外の脳の部位が大いに活性化されているように感じる。作曲に従事している時や絵を描いている時の脳の状態の研究は探せばいくらでも出てきそうなので、そうした研究論文にもアンテナを張っておこう。

今日の作曲実践では、普段通り、原型モデルに対して世界の様々なスケールを活用して曲を作ったり、ハーモニーの理論書の譜例を参考にして曲を作っていく。また、昨日から本格的に始めた、絵画作品に喚起されたものを曲にしていくことも今日も行う。1日に少なくとも1作品ほど絵画を参考にして曲を作っていく。今日はオディロン・ルドンの何かしらの作品を参考にしよう。すでに書斎の机にはルドンの画集を2冊ほど置いており、その準備はもうできている。フローニンゲン:2020/3/31
(火)06:25

5680. 日記の執筆・作曲・絵画創作の勧め

空がダークブルーに変わり始めた。自宅の目の前の住宅街の中を何台かの車がゆっくりと走り抜けていく。

小鳥たちは高らかな鳴き声を上げ、1日の始まりを祝福している。私たち人間の中で一体何人の人たちが、あの小鳥たちのように1日の始まりを祝福しているのだろうか。私は1日の始まりを祝福する人であり続けたい。

あと数ヶ月ほどすると、フローニンゲンでの生活も5年目となり、欧米での生活は9年目となる。気がつけばそのような年数が経っていたが、まだ9年程なのだという感じもする。

アートの国オランダは1つの永住拠点となった。デカルトやスピノザが生活していたライデンも魅力的なのだが、今のところ、フローニンゲンに長く拠点を置き続けようと思う。

オランダで生活をしていると、つくづく教育や精神風土が人間形成に与える影響は大きいと思わされる。日々オランダ人と接していてそのように思う。いかような人間形成がなされているかをここで全て語ることは難しいが、オランダの教育とこの国の精神風土は、間違った方向に人間形成をしないような力があることだけは確かである。

ここ最近、日記を執筆することを通じて変わっていく友人や知人たちの姿を見る。私自身が日記を毎日執筆することを通じて大きく変化してきたという経験をしているため、時に日記の効用について話すことがこれまであり、その話以降実際に日記を書き始める友人や知人たちが増えた。

皆一様に、書くという行為を通じて、いかような出来事が人生に降りかかってきたとしても、それと向き合いながら充実した日々を送っているように思える。書くことは大なり小なり、自己及び外界を客体化させ、観察者的な自己の状態にいざなう。そうした状態を日々短い時間でもいいので体験し、それを積み重ねていくことによって、ゆっくりとだが着実に変容に向けて歩んでいる姿が見受けられる。

書くという行為は時に—あるいはほぼ常に—、認識空間上のアトラクターの周りをグルグル回っているような形でなされるが、書くという行為の継続は、1つのアトラクター状態から次のアトラクター状態に移行させる力がある。既存のアトラクター状態というのは既存の発達段階に他ならず、移行先のアトラクター状態というのは次の発達段階に他ならない。

フローニンゲン大学の大学院のコースの中で、アトラクターと発達に関する論文を読んだ時に、特定領域の発達の飛躍が起こる前にエントロピーが増大し、発達の飛躍後、エントロピーが減少していく発見事項に興味深く思ったのを覚えている。

書くという行為とエントロピーの増大・減少について考えさせられる。今このように執筆している日記の中において、書き出しから中盤に向かっていく過程は情報的エントロピーの拡大現象が起こり、文章の終結に向けてそのエントロピーは減少しているのだろうか。だとしたら、1つの日記の中にミクロな発達現象を見出すことができ、そうした日記を毎日執筆し続けることによって中期的なメソの発達が起こり、長期的なマクロの発達が引き起こされるというのも納得がいく。

知性を涵養し続け、高度な知性を獲得した過去の偉人たちが一様に日記や手紙などの書くという行為を習慣にしていた理由もわかるような気がする。彼らは発達を希求して文章を書いていたわけでは決してないだろうが、書くという行為が結果として彼らの知性を育む1つの大きな要因になっていったのである。

日記を毎日綴り始めてからまだ4年間ほどであり、数も今回の日記で5679と非常に少ない数だが、そうした微々たる量の日記を執筆することを通じて、自分自身の変貌の様子も見て取ることができる。また、そうした変貌よりも何よりも、日記を執筆することによって、毎日が充実感に溢れるということが日記を継続して執筆することの最大の良さである。正直なところ、充実感という言葉だけでは括れないようなことがこの4年間の欧州生活の中にあっただが、実存的な危機の中にあっても書くことをやめず、逆に書くことによってそうした危機から脱却できた自分がいるように思える。

書く行為に内包された治癒と変容の作用には本当に驚かされる。実は、書くという行為の次に勧めたいものがある。それは作曲と絵画の創作である。立派なものである必要は全くなく、自分の内側の感覚を自分だけの曲や絵に表現していくこと、それを書くことの次に勧めたい。絵画の創作に関していえば、私はまだ本格的に絵を描いていないが、それでも毎日少なくとも1つ、水筆色鉛筆で作曲ノートに小さな絵を描き続けてきた。

作曲に関しては、俳句のような短い曲を日々作り続け、曲を作るという行為と絵画の創作行為は、文章を書くことでは実現できないような治癒と変容の作用がある。近々、デジタルアートの創作に本格的に着手し、作曲と絵画の創作を通じて、自己がいかように治癒されていき、いかように変容を遂げていくのかを観察・記録していきたいと思う。フローニンゲン:2020/3/31(火)06:53